平安時代

枕草子①

作者（清少納言）　随筆

春はあけぼの。（明け方）（をかし）

やうやう白くなりゆく山ぎは、（だんだんと）（ようよう）（山ぎわ）

すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。（をかし）

夏は夜。（をかし）

月のころはさらなり、やみもなほ、蛍の多く（言うまでもない）（やはり）（なお）

飛びちがひたる。（をかし）

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。（蛍）

雨など降るもをかし。（趣深い）

春は明け方が趣深い。だんだんと白くなっていく山際が少し明るくて、紫がかっている雲が細くたなびいているのも趣深い。

夏は夜が趣深い。月が出てるころは言うまでもない。闇もやはり、蛍が多く飛び交っている。また（蛍が）一匹、二匹などがかすかに光って飛んでいるのも趣深い。雨などが降っているのも趣深い。（のも趣深い）